

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ことばの限界、ことばの力 ー十七世紀イギリス宗教詩研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2449

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文要旨

あらゆる詩人にとり、自分のことばに何が出来、何が出来ないのかは重大問題である。だが扱う主題が神とその事績となるキリスト教詩人の場合、問題はさらに重大となるだろう。一方で信仰者として詩の形で神を讃美する事を求められている。他方、人間を超える超越的存在とされる神について、有限の人間のことばで十全に語り得るかについて疑いがある。信仰者としての召命と、自らのことばの至らなさの間の緊張の自覚が、宗教詩人にはある。

宗教改革から日も経っていない時代を生きた十七世紀イングランドの詩人たちにとり、この緊張はさらに強まる事になった。確かに神の無限と人間の有限との間の緊張は、キリスト教がその最初期から構造的に抱えるものである。しかしルターやカルヴァンら宗教改革者が、神の恩寵の絶対性を強調する「恩寵のみ」(*sola gratia*)のテーゼとセットの形で「全的墮落」の教義を主張した。「所謂『自由意志』の力は無であり、恩寵なしでは一切善を行わず、また行い得ない」(ルター)の¹、「神は人間のうちに、恩寵を施すよう義務づけるものを何一つ見出さない」(カルヴァン)というの²、彼らの主張であった。このように人間側に一切の自発的善行の可能性を認めぬ人間観を提示する中、善きことばを語る事の可能性・不可能性も問題になったのだ。またこの宗教改革の人間観から派生する形で、人間の執り行う祭儀においてキリストの事績、特に受難を再現(*re-present*)=表象(*represent*)する事の是非が神学上の論争になる。祭儀により神の事績を再現する事が不可能ならば、ことばにより神の事績を再現する事も不可能ではないかという問いが、並行的に生じる。従ってこの神学上の問題は詩人達にとっても捨て置けないものであった。

こうして教義上自発的な「善きことば」の可能性に深刻な疑義が付され、またことばによる神の事績の表象可能性が問題とされる中、そもそも宗教詩が可能なのか否かが、宗教詩人にとり問題になったといえよう。そのような背景の中で、詩人達はどうか宗教詩を書こうとしたのか。本論文では、17世

¹ ルター『奴隷意志論』。日本語訳は英訳 (Philip S. Watson [ed.], *Career of the Reformer 3 in Luther's Works*, vol.26 [Philadelphia: Concordia Publishing House, 1972] 所収の *Bondage of the Will*) より。該当頁は 68。

² カルヴァン『キリスト教綱要』。日本語訳は英訳 (John Dillenberger [ed.], *John Calvin: Selections from His Writings* [Missoula: Scholars Press, 1975] 所収の *The Institutes of the Christian Religion*) より。該当頁は 455。

紀を代表する3人の詩人、ジョン・ダン(John Donne, 1572-1631)、ジョージ・ハーバート(George Herbert, 1593-1633)、ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)の作品を、時にこれらの詩人から影響を受けた20世紀・21世紀のアメリカ詩人の作品を合わせ鏡にして読み解きながら、ことばの限界とことばの可能性を共々意識した中でのかれらの詩作のあり様を検討する。

以下、各部で扱う内容を紹介しておく。

第一部で扱うのはダンである。本論文で扱う三人の詩人中、カトリックからの転会者はダンのみだ。この転会が「回心」なのか「背教」なのか或いは「順応」なのかは議論が分かれるが³、国教がプロテスタントとなった体制下、カトリックに留まるか否かは、ダンにとり抜き刺しならぬ問題であったに違いない。とはいえ宗教詩人としてのダンを考えるにあたり、公的に行った「転会」以上に重要なのは、プロテスタント、カトリック各々の教義の持つ傾向が、詩作にどんな含意を持ったかである。贖罪主の事績を典礼で表象する事につき、プロテスタント、カトリック各々がどんな態度を有していたか。典礼論以前に救済論のレベルで、各々の教義にどんな傾向が内在していたか。それらプロテスタント的・傾向とカトリック的・傾向との緊張が、ダンの詩の内容・表現上のどんな特徴に結実しているか。そしてそれらの特徴が、後世の詩人にどう継承されたか。これらの問題を第一部では考える。

ルターやカルヴァンらは「恩寵のみ」の立場から、信仰者が実体的に義であるか否かに関係なく、神が信仰者を義と見做す事に救済があると主張し、信仰者側の協働の可能性を、神の恩寵の比類なさを損うものとして退けた。

³ 17世紀のウォルトン(Izaak Walton, "Life of John Donne"[1640])から19世紀のゴス(Edmund Gosse, *The Life and Letters of John Donne*[1899])までは、批評家の間では概ねこの転会は「回心」(conversion)と捉えられていた。ただしこの見方は、教派の間での回心を俗世での生活から聖職者としての生活への回心の一部と見る傾向を含んでいた。ダンの転会を、かれの世俗的野心を動機にした「背教」(apostasy)と見る批評として最も典型的なもののは John Carey, *John Donne: Life, Mind and Art* (London: Faber and Faber, 1981) であろう。より最近では、Jeanne Shami, *John Donne and Conformity in Crisis in the Late Jacobean Pulpit* (Cambridge: D. S. Brewer, 2003) のように、特にかれの説教に注目しつつ、ダンの転会がプロテスタント国教下のカトリック教徒が選んだ「順応」(conformity)であり、かつ説教を通してそれら「順応者」(conformists)の良心の呵責を和らげようとした、という研究もある。このようなダンの「転会」に関わる議論の歴史については、Achsah Guibory, "Donne and Apostasy" (in Jeannie Shami, Dennis Flynn and M. Thomas Hester (eds.), *The Oxford Handbook of John Donne* [Oxford: Oxford University Press, 2011], 664-677) に詳しい。

義で「ある」事ではなく義と「見做される」事を救済の本質とする点で、そこには名目論的要素が認められる。他方この潜在的に名目論的な要素に反発して、カトリック側は、義認にあたっては信仰者が義と「見做される」事と義「である」事は不可分とする実在論的立場を取り、また信仰者側の神との協働は可能かつ必要と主張した。罪の意識に苛まれ続ける信仰者にとって、現実の魂の汚れに関係なく義と「見做される」事で救われると説くプロテスタントの名目論には魂を安心させるものがある一方、同じ信仰者が、義と「見做される」が義「である」状態に直結しない事に飽き足らず、実在論に立つカトリック的救済観に惹かれてもおかしくない。この相反する感情がダンの詩の語り手の振舞いを規定している事を、第一章「「名目的」義化が「実質的」聖化かーダン『聖なるソネット』における救済論的逡巡」では論じる。

実在論的なカトリックと名目論的なプロテスタントの対立は、救済論のみならず表象論に及ぶ。表象の世界に実在論を適用すれば、記号と記号内容との繋がりを肯定する方向に向かおう。聖餐（ミサ）はキリストによる十字架上の自己犠牲（受難）のリアルな反復であるというカトリックの聖餐論は、記号（典礼）と記号内容（キリストの犠牲）の繋がりを認める故に成立するものだ（所謂化体説[司祭の所定のこぼ・動作により、パンとブドウ酒がリアルなキリストの体とキリストの血に変わるという説]も、同じく実在論的立場から生まれたといえよう）。だがプロテスタント側はこのカトリックの聖餐論を、受難による贖罪の唯一性・一回性を否定するものとして斥けた。記号（典礼）は記号内容（キリストによる犠牲）のユニークさを十全に伝え得ないとした点で、プロテスタントの主張は名目論的だ。そしてこの聖餐論における受難の再現可能性・不可能性の問題を文学の世界に移して考えれば、受難を詩のかたちで再現＝表象し得るか否かの問題になろう。この点に関わるダンの態度を探るのが第二章（「受難をどう描くか/描かないかーダンの場合」）である。『冠』(*La Corona*)に収められた「十字架刑」(“Crucifixion”)、『聖なるソネット』中の「わが顔に唾せよ、ユダヤ人達」(“Spit in my face ye Jews”)、「今宵が世界の最後の夜であったとしても」(“What if this present were the world’s last night?”)、あるいは「1613年聖金曜日：馬で西に向かう」(“Good Friday 1613: Riding Westward”)を取り上げながら、プロテスタント的立場から導かれる受難の再現＝表象不可能性を意識しつつも、詩人がカトリック的な積極的受難表象に惹かれていた事を論じる。

このようなダンの実在論的傾向、特に表象における実在論的傾向の意外な受容の例を紹介するのが、第三章「For the Love of God: オストライカーのダン受容」である。世俗的な21世紀アメリカに生きるユダヤ系女性詩人オス

トライカー (Alicia Suskin Ostriker, 1937-) の神との関係は、教派間での揺れはあるとはいえキリスト教信仰の中に収まるダンのそれより複雑だ。特にその超越性と不可分の神の父権的性格・暴力性に彼女は激しい抵抗感を持っている。にもかかわらず神を描くオストライカーのことば遣いは、具体的かつしばしば肉感的である点で、ダンのことば遣いと通底する。反＝宗教詩における一捻りした宗教詩の言語の使用の例が紹介されよう。

第二部で扱うのはハーバートだ。ハーバートの場合、第一部で見たダンとは異なってイギリス国教会から離れる事なく、救済観において宗派的揺れはなかった。つまり国教会三十九箇条 (Articles of Religion) に含まれたプロテスタント的「恩寵のみ」の救済観が生涯かれのものであったと言える⁴。だが救済観において振れがなかった分、その救済観が表象の世界で持つ含意を、かれは一段と深く考えていたのではないか。「恩寵のみ」のテーゼと表裏一体の人間の全的墮落の教義を自らの活動に当てはめるならば、詩人は自らの詩作も墮落から自由でない事を認めざるを得ない。加えて、神を讃美する詩を作るという一見敬虔な業の下に、詩作という業に救済を恃んで神の恩寵を

⁴ 例えば『国教会 39 箇条』の第 10 箇条 (“Of free will”)には

The condition of the man after the fall of Adam is such, that he cannot turn and prepare himself by his own natural strength and good works to faith and calling upon God: wherefore we have no power to do good works pleasant and acceptable to God, without the grace of God by Christ preventing us, that we may have a good will, and working with us when we have that good will.

(アダムの転落後の人間の状態は、自身の自然的力と善行とでは信仰と神に呼びかける事には至れない種のものだ。従って私達には、善き意志を持つようキリストによる神の恩寵が先行するのではない限り、またその善き意志を持った後もその神の恩寵が共に働くのではない限り、神が快しとしました受け入れる善き業を行う事が出来ない)

とあり、続く第 11 箇条 (“Of the Justification of man”) は

We are accounted righteous before God, only for the merit of our Lord and Saviour Jesus Christ by faith, and not for our own deservings.

(私達はひとえに私達の主にして救い主であるイエス・キリストの功のゆえ、信仰により義とされるのであって、私達の価値によるのではない)

という一文で始まる (上記の引用は、Brian Cummings [ed.], *The Book of Common Prayer: The Texts of 1549, 1559 and 1662* [Oxford: Oxford University Press, 2011]) に依る。訳文は西川)。チューダー朝からスチュアート朝・ジェームズ I 世治世下のイギリス国教会の主流の神学が、宗教改革的 (具体的には穏健なカルヴァン主義) なものであり、人脈的にもハーバートがこの流れに属する人物であった事は、例えば Daniel W. Doerksen, *Conforming to the Word: Herbert, Donne and the English Church before Laud* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1997) に詳しく説明されている。

蔑ろにする僭越の契機が潜まないか、という問いも生じる。これらの問いに、ハーバートが敏感に向き合っている様を検討するのが、この部の課題である。

第四章「受難をどう描くか/描かないか—ハーバートの場合」は、かれの詩集『寺院』(*The Temple*)の冒頭部分に集中して置かれている受難の詩についての考察である。詩群の最初の作品「犠牲」(“*The Sacrifice*”)は、ある意味ダンの受難の詩より大胆な事に、十字架上のキリストの劇的独白の形を取っている。ただしこのキリストが繰り返し口にするのは、「この私の痛みには比類する痛みがあったか」という、受難の類比＝再現の可否を問う問いだ。「犠牲」に続く詩は、詩人が語り手を用いてこの問いへの回答を出そうとする試みであろう。他の事績ならば応えるために善行を積む事が出来るかもしれないが、こと受難による贖罪については、その比類なき故に沈黙する外ない。語り得ると考える事は傲りである(“*The Thanksgiving*”)。こうして受難の語り得なさを悟らされると、今度はこの語り得なさ自体を詩のテーマにし、自らが受難について記す主体から受難の物語りを記される客体に変えられるよう祈願する(“*Good Friday*”)。こうした試行錯誤を経て再度詩人が受難の詩を書く時(“*Redemption*”)、その詩は受難の饒舌な再現ではなく、その出来事の意義を読者に考えるに任ず、寡黙な寓話の形を取る。

どの詩人であっても詩についての詩、いわゆるメタポエティカルな詩には、その詩人の詩作に対する自意識が現れよう。第五章「ことばと「御言葉」—ハーバートの宗教詩におけることばの限界の意識」は、ハーバートのメタポエティカルな詩篇を集中的に取り上げ、かれの宗教詩人としての自意識を探る。聖俗二元論の立場から世俗の詩を虚なるものとして斥け、あからさまに宗教詩人としての自負を語った詩もある(“*Jordan(I)*”)。また、その自負が災いして美辞麗句の探究に汲々とした結果、神への讃美という宗教詩本来の目的を見失ったものの、見失った事を神から気づかされる事で思い・ことば双方の行き詰まりが打開される様を思い描いた詩もある(“*Jordan(II)*”, “*A true Hymn*”)。だが最も読者の心を打つのは、神の「御言葉」を前にした自らのことばの有限性を意識しつつも、なお自らのことばと想像力への拘りを捨て去れない事を告白した詩(“*The Forerunners*”)だろう。いわば非力を認められない非力、詩人としての自我を放棄する事の不可能を悟っていた事に、ハーバートの信仰者・詩人共々としての洞察の深さを見て取る。

こう見るとことばの可能性の意識とことばの限界の意識のうち、ハーバートは後者に傾斜し、聖なる事績という記号内容を伝える十全な記号になり得ない自らの墮ちたことばへの根源的懐疑を有していたように見える。確かにその通りなのであるが、第五章でもある程度は触れた通り、自らのことばの

限界・自らの想像力への拘りを痛感させられたその時に、恩寵により想像力が活かされ、限界あることばが嘉せられる実感—「実感」より控え目な、予感=foretaste の語を用いる方がハーバートのかもしれない—を詩人が得ている事も否定出来ない。第六章「ことばの贖い—ハーバートの宗教詩におけることばの可能性」は、かれの詩の中で慎ましやかにではあれ予感されている、ことばの救済・創作者としての自我の救済について論じる。刹那・有限なるものの形容に付されたのと同じ形容詞が永遠・無限なるものの形容に用いられる事で、その形容詞の表す性質と、詩人の詩行も含むその形容詞によって形容された時間的なものが、永遠に連なるものとして提示され直す様 (“Life” “Vertue”) を考察する。さらに、ハーバートの作品中で最も自伝的とされるもの (“The Pearl” “The Flower”) を取り上げ、詩作が詩人としての自我への拘泥の場となる一方、同時にその救済の場として捉えられていた様、記号としてのことばが贖われる場として捉えられている様も明らかにする。

第六章で見る通り、ハーバートは詩作が自我ゆえの躓きの場となる一方、神の恩寵を経験する場・精神的再生を経験する場としても捉えている。再生の源として神を認めるか否かは大きな違いだが、詩作が精神再生の場になるという感覚は、非・宗教的詩人にもあり得るものだ。第七章「心痛と覚醒：ハーバートの「知られざる愛」とビショップの「草」」は、二十世紀アメリカの女性詩人エリザベス・ビショップ(Elizabeth Bishop, 1911-76) が、自らハーバートの詩の改作と呼んだ作品で示唆しているこの感覚を論じたものである。心痛が信仰生活における精神覚醒の契機になるというハーバートの詩 (“Love Unknown”) の展開を、彼女は脱宗教化した上で創作心理の文脈に置き直し、詩作が心痛を契機にしながらも精神の覚醒へと繋がる様を自作 (“The Weed”) に描いた。罰しかつ赦す神は不在だが、心痛を経ての覚醒が詩作と結びついている点で、ビショップの語り手の経験はハーバートの語り手の経験と響き合う事を論じる。

第三部で扱うのはミルトンである。カトリックからイギリス国教会に転会したダン。生涯イギリス国教会に安んじたハーバート。この二人に対しミルトンは、イギリス国教会のプロテスタント化を不十分とし、イギリス内戦時(1649-60)には積極的にピューリタン側に加わった。神的なものとの峻別をピューリタニズムの特徴とするなら、ピューリタニズムにコミットした信仰者詩人に相応しく、見方によっては頑なな程に、有限の人間のことばと無限の神との間の断絶を意識していたように思える。これは一方で宗教詩人に沈黙を強いる方向に働こう。だが他方、有限側のものについて有限な

ことばで語る事を通じ、逆説的に限界の向こう側の何者かの存在を承認する契機も生じないか。この双方の可能性を考えるのが第三部の目的である。

第八章「ことばと真理、ことばと嘘—『樂園喪失』における論理と「逆説」」は、『樂園喪失』中の父なる神の詩行とサタンの詩行を比べつつ、神の超越性をことば・論理からの超越性に見て取り、同時にことば・論理の有限性を意識させるミルトンの姿勢を明かすのが目的である。『樂園喪失』第三巻に登場する父なる神は、自らの全知(含前知)全能(含予定)を主張しながら、サタン・人間の墮罪を専らかれらの自由選択の結果と断じ、自らの責任を全否定する。神の側の居直り・矛盾とも映る詩行であるが、これはミルトンが人間の論理・感性からの超越を含む神の超越性を示すためのものと考えられないか(と同時に、全知全能の主張との矛盾のリスクを冒してまで、天使・人間の自由意志を擁護しているともいえる。この態度はプロテスタントでも、ルターやカルヴァンら第一世代のプロテスタントよりは、アルミニウスに代表される第二世代のプロテスタントの態度に近づいたものだ⁵⁾)。他方この父なる神の詩行と比すと、第九巻のサタンによるイヴ誘惑の詩行はまことに論理的に響く。実はこの詩行には悪を概念として知る事と悪を現に舐めて知る事の混同という詭弁が含まれているのだが、サタンの修辞・論理展開が余りに巧みでこの詭弁を見破る事は難しい。こうして「ことば巧みさ」をサタンの詐術の一部とする事で、ミルトンが被造物のことば・論理の有限性、墮罪への共犯性を示唆している様を考える。

ことばが魅力的なサタンの造形、ことばが非魅力的な神の造形を通し、ミルトンが伝えようとした神の超越性、ことば・論理を含む人間の限界性を正面から受け止めた『樂園喪失』読者の一人に、無教会キリスト者の日本人がいた。第九章「超越的なるものの復権—矢内原忠雄『樂園喪失』講義を読む」では、第八章で扱った『樂園喪失』中の箇所(の矢内原による読解)を検討する。およそ人好きのしない措辞の故に批評家から酷評されてきた『樂園喪失』第三巻中の神の言語について、矢内原は独特の詩情を読み取り肯定的に評価する。反[ないし超]・詩的なるものに備わる詩情を認める矢内原の批評眼から、学ぶべき所がある事を論じる。他方、第九巻のサタンのイヴ誘惑のことばに

⁵⁾ 用いられている用語等の面で若干の留保は必要だが、恩寵の拒絶可能性という形で救済における人間側の選択力・応答能力を認めている点で、ミルトンはアルミニウスの、少なくとも正統的なカルヴィニズムからは逸脱しているとするのが、ミルトン研究者の主流意見である。代表的なものとして Dennis Danielson, *Milton's Good God: A Study in Theodicy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), 82-163; Thomas N. Corns, *Regaining Paradise Lost* (London: Longman, 1994), 78-86; Benjamin Meyers, "Predestination and Free Will in *Paradise Lost*" in *Scottish Journal of Theology*, vol.59, no.1 (2006), 64-80 等。

については、矢内原はその合理的響きに潜む知識至上主義を信仰者の立場から糾弾しつつ、信の知に対する優位を認めた上での知の営みは肯定する。これは所謂キリスト教的ヒューマニズムの立場で、かれが第三巻の講義で見せていた姿勢からすると微温的かもしれない。だが「知り得る事を知る（知るのを許された範囲で知る）」のを認める姿勢は「語り得る事を語る」ことばの可能性を認める姿勢に繋がらないか。その点を考察する。

人間の論理・ことばを超えた神、という意識を強く持っていたミルトンの受難表象—ないしその不在—について考えるのが、第十章「受難をどう描くか、描かないか—ミルトンの場合」だ。ミルトンの初期の作品にはずばり「受難」(“The Passion”)と題された詩がある。この作品は自らが受難という主題を扱い得る程の成熟に至っていないとの弁解で結ばれており、その弁解通り、同作は語り手の大袈裟な身振りが空回りした失敗作と言える。だが興味深いのは、ダンやハーバートの受難の詩を意識した箇所が見られる点だ。彼ら同様、ミルトンも神の子の死という主題の恐れ多さに言及しているのである。ただ彼らがそのような言及にも拘わらず受難をリアルに語る事、ないし受難の語り得なさ自体を詩のテーマにする事を選ぶのに対し、ミルトンは、受難の語り得なさが文字通りのものである事を証すべく、意固地と見える程に拙い詩行を綴っている。また詩人の経歴後期の叙事詩(『楽園喪失』『楽園回復』)でも、作品の展開上受難について語らざるを得ない場合、リアルなディテールに触れる事は極力避けている。語り得ない事については頑なに語る事を拒む事により、神の子の死の恐れ多さを尊重するのが、ミルトンの宗教詩人としての流儀であった、というのが本章の提示する仮説である。

このように論じてくると、ミルトンは専ら超越的なものを前にした人ことばの非力を意識していたように見えるかもしれない。この意識が後に続く詩人に、宗教詩を書き難くさせる方向に働くのは間違いなかろう。だが他方で、このような語り得る事と語り得ない事の峻別は、語り得る事を積極的に語る契機にも、またそうする事で語る事を可能にする語り得ない存在を証しする契機にもなり得ないか。第十一章「真実を見据えた嘘—ウィルバー「嘘 (“Lying”)」試論」は、自らに影響を与えた先輩詩人としてミルトンを挙げたアメリカの詩人、ウィルバー(Richard Wilbur, 1921-2017) が、この契機を先輩詩人の中に読み取っていた事を証す。被造物に比喻という形で賓辞を付す事が、賓辞を超えた創造主の技の承認となる事、それが小文字の creator に過ぎぬ詩人が大文字の the Creator に連なる唯一の方法である事が、ウィルバーが『楽園喪失』のサタンを反面教師にしつつ学んだ知恵であった事を明かす。

宗教詩人は、語り難い、あるいは語り得ない事柄を主たるテーマとする詩人達である。かれらが語り難い、ないし語り得ない事柄をどう語っているか、その語り難さ・語り得なさ自体がどう語られているか、また語り得る事を語る力をどう活かしているかについて、多少なりとも明らかになれば、本論文の目的は果たされた事になる。